

KONAN UNIVERSITY

アート創作の治療的意義についての考察(1) - Edith Kramerのアートセラピー理論を手がかりに -

著者 (英)	Akane Naito
journal or publication title	心の危機と臨床の知
volume	1
page range	77-88
year	2000-07-20
URL	http://doi.org/10.14990/00002439

アート創作の治療的意義についての考察(1)

Edith Kramerのアートセラピー理論を手がかりに

甲南大学心理臨床カウンセリングルーム 内藤あかね

はじめに

心理療法面接の時間中に、描画や造形行為が補足的に導入されたり、治療の流れから自然と行われることがある。一方、面接の開始に先立ち、描画や造形を行うことをほぼ前提とする形式の心理療法もある。いずれも「アートセラピー」(その他、「芸術療法」、「絵画療法」など)と呼ばれている。一般に、日本で行われているアートセラピーでは、治療者がクライエントの制作した作品と共に眺めながら何らかの言語化を求める。言語化は、軽く印象を尋ねる程度から、フィードバックを通して洞察を深めてもらうような仕方まで多様であり、クライエント自身に連想を掘り出させたり物語を語らせたりすることもある。治療者が言語化を重視するしないにかかわらず、クライエントの作品はそこに現れるイメージの変遷を見たり、意味や感情や病理を見いだすための手がかりとして扱われ、作品とその創作過程の芸術的質を問うようなことは少ない。例えば、飯田真は、「芸術療法が治療の一手段である限り、病者から芸術的完成度の高い作品あるいは芸術的な演劇性を期待するべきではない」と述べているが(1984, P.22-23)これは日本の治療者の多くが描画や造形を心理面接に取り入れる

場合に、概ね共有している意見であろう。治療にアートを用いるとしても、アートを統合度、完成度の高いものにすることは治療の目標にならないのである。しかし、本論文においては、そのようなアートセラピー観とは異なり、アート創作に比重を置き、言語化は副次的であっても創作活動により多くのエネルギーや時間を注ぎ、その過程自体に治療的意義を見いだすようなアートセラピーについて論じたいと思う。その構造的理解を、米国のアートセラピスト、エディス・クレイマー(Kramer, Edith)の理論を軸にして進める。彼女のアートセラピストとしての仕事は、主に児童を対象としているが、その理論は成人のアートセラピーにも適用可能なものであると考えられ、実際に米国のアートセラピストに影響を与えてきた歴史がある。本論文の前半ではクレイマーのアートセラピー観を概観し、後半において、それを検討しながらアート創作活動のもつ個人の心理的変容への可能性について考察してみたい。

Edith Kramerのアートセラピー観

1. 治療としてのアート(Art as Therapy)

クレイマーは米国のアートセラピー界において、先駆的な第一人者として長年に渡り活動が続けた人物である。出身のオーストリア、ウィーンで美術教育を受け、1930年代後半にプラハでナチス・ドイツからの避難児童に美術を教え、その後アメリカへ渡って、主に情緒障害に苦しむ児童を対象に施設や病院でアートセラピーを行った。美術教師でありアートセラピストであったクレイマーのアートセラピー観の特徴は、彼女の1971年の著作

“Art as Therapy with Children”（邦題「心身障害児の絵画療法」）の題名に表れていることからわかるように、“Art as Therapy”の考え方を強調した点にある。クレイマーは、その著書の序論でこのように述べている。

私の視点は、芸術領域における専門技術と、幼年時代の正常と異常についての一般的知識と結びつけている実践的な芸術家や教師にある。私が児童心理を理解する上での理論的枠組は、フロイト学派の精神分析的思考に中心をおいている。けれども強調しておきたいのは、道具としてアート（art as a tool）をもちいる心理療法におくよりも、治療としてアート（art as therapy）をもちいるという観点に立っていることである。すなわち、この治療的アプローチは、無意識を含めた心的過程の認識（awareness）に基づく一方で、本書で述べている治療手段（therapeutic maneuvers）は、無意識的な材料を明らかにしたり、無意識の意味を解釈することにならな。それよりも、アートセラピーは自我を支持したり、同一性感覚の発達を助長したり、一般的に成熟を促したりする手段として第一義に考えられる。その主な役割は、アートの力によって、圧力を受けても挫折しないで機能することのできる心的統合の発達に貢献することにあると思われる。このように考えると、アートセラピーは治療的環境に欠くことのできない構成要素の一つであり、心理療法に取って代わるものではないにしろ、それを補足ないし支援する治療形式になるのである（1980, 邦訳版を一部改変。P4）。

この「治療としてアート」（art as therapy）と「道具としてアート」（art as a tool）の対比は何を意味するのであるか。「道具としてのアート」とは、米国でクレイマーに先立つ時代から活躍したアートセラピストのマーガレット・ナウムブルグ（Naimburg, Margaret）（1966）が、精神分析理論に基づいて考案したアートセラピー理論に見られる、クライエントのアートを無意識の表出および最終的には言語による意識化へ導く手段とする考え方を指している。アートを無意識とのコミュニケーション・ツールと見なし、クライエントが無意識を意識化する手段として主に利用したナウムブルグと自分とは立場を異にすると、クレイマーは明言している。クレイマーは、精神力動的解釈をよすがとするけれども、クライエントによるアートの創作過程および作品の質を自己支持的な視点から重視する立場であり、特に「昇華」の機能を強調して、創作行為そのものの治療的効果を最大限に生かすことを治療の方向性として提唱したのである。

クレイマーと同時代にアートセラピストとして活躍し、米国アートセラピー界の重鎮であったエリノア・ウルマン（Uman, Elinor）は、アートセラピーの定義について論じた論文（1961）の中で、クレイマーの考え方をナウムブルグのそれと比較しつつ紹介している。ナウムブルグが主に精神科病棟などの強固な枠組みをもつ環境でアートセラピーを実践したのに対し、クレイマーは（主に低所得者層の）重度情緒障害児施設において、アーティストと治療者と教師の役割を果たすような仕事をした。この臨床経験の違いが、両者とも精神分析理論を基底にしているにもかかわらず、対照的なアートセラピー理論を形成するに至った一

因であるとウルマンは見ている。ナウムブルグがクレイマーを「美術教師」と評したエピソードを挙げ、クレイマーの理論的枠組みからすれば、ナウムブルグはアートセラピストとは呼べず、一心理療法師に過ぎないであろうとウルマンは言う。ウルマンの指摘は、アートセラピーにおけるアートとアートセラピストの役割について両者が異なつた捉え方をしており、ナウムブルグのアートセラピーが言語中心の心理療法に近い一方で、クレイマーのアートセラピーは美術教育に近い性格をもっていることを示唆していると考えられる。

ナウムブルグ(1966)は、アートセラピーにおけるアートを芸術作品ではなく「象徴言語(symbolic speech)」と見なし、クライエントにもそう伝えることが、描画への取り組みやすさへつながると言う。そして、スクリブル法によって生まれたイメージのように、クライエントが自発的(spontaneously)に創出した描画イメージに投影された意味を自ら自由連想的に解き明かし、言語を通して意識化して葛藤を解消していく援助をすることがアートセラピストの主要な仕事だと考える。ナウムブルグは、アートセラピストは心理療法の訓練を十分に受けていれば、必ずしもアートの訓練を受けていなくても、創造行為に開かれ共感できる資質の持ち主であればよいと考えている。このような心理療法に用いられる一手段としてのアートというアート観とクレイマーのそれとは一線を画する。先の引用においても、クレイマーはアートセラピーとは心理療法を補完するものであっても、代わりになるものではないと述べている。ナウムブルグがさほど留意しなかったアートの質により高いものを求める姿勢は、クレイマー

がナウムブルグとは異なる治療観をもっていたことの一証拠である。クレイマーは、クライエントがアートの創作活動にエネルギーを注ぎ心身をつかって、より高い質のアートをつくり出そうとする過程そのものが、クライエントの自我を育て、人格の統合を促進する治療的意義をもつものと見なし、「昇華」の概念で説明していると思われる。その創作過程の援助をするアートセラピストには、心理療法の知識だけでなく、アート創作への理解と技術的な裏付けが必要である。それなしでは、「治療としてのアート」は成立しえないであろう。

2. アートの質の問題 画材の扱いと技術をめぐって

アート創作には画材を用いる。その画材を目で追いながら主に手で操作する。アートセラピーが言語による心理療法と決定的に異なる点は、この画材というアーティストの内的世界と外的物質世界を結びつける媒介物の存在であり、身体活動を伴うことである。クレイマーは、画材の用いられ方には5つの範疇があると考え(1971, pp.54-58)。

準備活動(precursory activities)

なぐりがき(スクリブル)、塗りたくり、画材の物理的特性の探索

象徴形態をとらないが、積極的で自我親和的である。

秩序のない発散(caotic discharge)

こぼし、まき散らし、連打

コントロール喪失につながる破壊的行動である。

防衛として使用されるアート(art in the service of defense)
模写・模造、なぞり描き、慣習的表現などのステレオタイプ
的反復

絵文字 (pictograph)

言語を補完する絵画的コミュニケーションで、心理療法やアートセラピー、または親しい個人間での私的なやりとりにおいて成立しやすい。

形態化された表現 (formed expression)

象徴形態が結実し、自己表現とコミュニケーションとが成立している。

クレイマーは前記のカテゴリーを子どものアートを構造的に理解するために提示したのであって、アートを厳密に分類することは出来ないと言つ。また、子どもが創作過程において、各カテゴリーを行きつ戻りつしながら、時にアートセラピストの支援を受けて表現にたどり着くことを数々の事例で示している。創造的な芸術表現を重視するクレイマーは、の絵画表現の価値を認めながらも、準備段階的なものか心理的限界を投影した機能不全の現れか限定されたコミュニケーションであるとする。クレイマーが「アート」と見なしたのは、の形態化された表現に到達した作品だけである。

ここで注目したいのは、の絵文字と、の形態化された表現の違いである。米国の著名なアートセラピスト、ローリー・ウィルソン (Willson, Laurie) は、クレイマーの1979年の著作“Childhood and Art Therapy”のイントロダクションで、上記の

画材の使用法に関するクレイマーの考え方を紹介している。ウィルソンは絵文字というカテゴリー分けを論議的となりうると言い、絵文字は多くの場合、私的なコードに基づく表現となるため、外部からは理解しにくい未消化な表現であって、統合度や喚起作用を欠くと説明している (Wilson, 1979, Pp. xxviii-xxix)。

この点を敷衍して考えると、クレイマーにとって「道具としてのアート」は、描き手が創造過程において身体的・知的・情緒的作業を十分に行った努力の成果として生まれる形態化された表現とは言えず、絵文字の表現に留まっていると見なされるのである。絵文字を含め、の絵画表現にもアートの要素は含まれていて、クレイマーはその価値を認めているが、クレイマーの定義するアートとは次のようなものである (1980, P.69)。

芸術は、手段の応用 (economy of means) 内の一貫性 (entity) として喚起力 (evocative power) によって特徴づけられている。芸術は、このような一般的な記述以上の定義づけをしりぞける。

拡大して述べるなら、質の高い創造的なアート制作には、技術的な手段の応用、内的一貫性、喚起力という特性が認められるといつことである。蛇足ながら、ここで言う「アートの質」が、単なる技術的な巧拙を指すのではないことは明らかであろう。

クライエントの制作行為がより創造的なものとなり、作品の質がより高いものとなるような援助をアートセラピストが行うために必要な知識について、クレイマーはアートセラピーと美術教育

との接点について議論しながら述べている(1971)。クレイマーは、人間の描画技能の獲得には一定の発達の方が観察されることが、そしてアートの創作行為には無意識が作用することという二つの発見が、近代の美術教育の領域に大いなる影響を与えたと言う。そして、精神的な思考が美術教育に与えた影響を示す例として、ナウムブルグの姉であり、優れた美術教育者であったフロレンス・ケイン(Cane, Florence)が児童のために考案したスクリブル法を挙げている。ケインのスクリブル法(1952)では、子どもは目をつむって腕を大きく動かしながら大きな紙にスクリブルを行い、できあがったスクリブルからイメージを探して、そのイメージを生かした絵に発展させる。そこには、全身を動かして大きな筋運動を伴って線を描くことにより、子どもが防衛を緩め、ステレオタイプで慣習化した描画から自由になつて描く機会を与え、最終的には作品を介して内的なコミュニケーションが図れるようにするという意図がある。子どもの想像力を喚起し、描画に見いだしたイメージとの交流によって、子どもが潜在的にもっているであろう内的なイメージに触れることができる考えたのである。クレイマーはケインの姿勢とこの技法の成果を評価しているが、ケインのこうした意図を離れ、子どもの発達段階も考慮されないまま、小さな紙に描かれたスクリブルの上を塗り絵するような仕方では、この技法が美術の授業で安易に使われている事実に触れ、批判を述べている。クレイマーは、人がステレオタイプな絵を描くことを否定してはいないし、その行為の防衛の意味を重視している。しかし、身体感覚と創作行為の結びつきに留意し、精神分析理論を基底にして独創性や個性的表現の

促進を意図して考案された技法が、その着想に理解のない教師によって適切さを欠いて用いられるとき、それは静物のデッサンといった伝統的な制作課題以上に子どもに機械的で無個性な描画を行わせる可能性があると指摘するのである。

この形骸化されたスクリブルの使用法への批判を例に挙げて、クレイマーが逆説的に述べようとしていることは、現代の美術教育が創造的表現や自己表現に価値を置いて、伝統的美術教育になり技法や画材を取り入れていった結果、かえって創造性の発現を阻み、個人の表現をステレオタイプなものにしているという捉え方である。アートセラピーにおいても、クライエントが創造的表現を形態として産むような域に達するまで進めていこうとすれば、そこには必ず絵画造形に関する技術や画材の使用法や表現の指導法の問題が生じてくる。そのことをアートセラピストが十分理解しておく必要性をクレイマーは主張しているのである。

3. 昇華

クレイマーは、描き手の作品が真のアートの域に達しなければ意味がないと言っているのではない。描き手の能力や心理状態の限界の範囲内で、アートを目指すという指向性を重視しているのである。その根底に、「昇華」作用への評価がある。「昇華」は、フロイトの考えた自我の防衛機制の一つであるが、クレイマーは昇華を「欲動エネルギーをその本来の目標からそらし、ものごとを成就する方向へ置き換えるプロセスである」(1980, p.88)と理解し、それが複合的な機制の働きに見られることを示した上で、「欲動のもつ危険と欲動の潜在的な破壊力とを建設的に活用

する上でのひとつも効果のある手段の一つである」(同)と述べている。クレイマーが昇華を重視するのは、彼女の臨床体験が主に劣悪な環境で育ち、情緒障害またはそれに類する問題を抱える子どもとの関わりであることと関係が深い。クレイマーは事例を通して、子どもたちの強い感情と攻撃的衝動、性的衝動に起因する葛藤やファンタジーがアートの創作過程と作品において発生したり再体験されたりする様子を示した。そして、それらがどのように子どもとアートセラピストによって扱われ、子どもに再統合されるかを説明している。クレイマーは、「アートには、昇華の形式によって、欲動エネルギーをその中性化を完全に求めることなく固めさせ内包する力がある」と述べる(1971, P.219)。そして、アートセラピーにおいて、作品が高い質をもつ表現に結びつかなくても、クライエントは生産的な活動をし、昇華への努力をすることによって、何らかの喜びや満足を経験できると考える。ここでは一つの事例を取り上げて、クレイマーの考え方を検証してみる。この短い事例の記述からは、メアリーという子どもの抱える心理的問題にどのような要因が考えられるか、セッションの中で生じてきた彼女の衝動性や攻撃性が何に向かっていたのか、そして治療関係のあり方などはわからない。しかし、この事例は、クレイマーがアートセラピーにおける昇華の過程を説明するために例示したものの一つであるので、検討に値すると思われる。

「事例 メアリー 8歳」

メアリーはエネルギーに溢れ、知的に優秀な子どもだったが、

神経症的問題として、衝動行為、泣き叫び、かんしゃくをもっていた。創作面での能力と興味がうかがわれたので、収容施設において支持的方法で絵画セッションが行われた。当該のセッションの時点で、彼女にはある程度の自己統制を得ようとの努力が認められた。

その回、メアリーは絵の具の混色から始めた。新しい刺激的な色彩や色の組み合わせを発見したときは満足げだったが、次第にこの気ままな自由さが彼女には重苦しくなり、むやみやたらと混色を行うことによって、絵の具の大半を褐色がかった滅茶苦茶なものに変えてしまった。メアリーの気分も破壊的になつてきて、紙だけでなく備品や彼女自身にも絵の具を塗りたくることが予想された。早く手を打たないと悲嘆やかんしゃくに終わりそうだった。

メアリーが紙面の2/3を赤とオレンジをまだらに散らした茶系の塗たくりにしたところで、「は彼女にそれをやめさせ、私にはこれは秋のニューハンプシャーの山みたに見えるよ」と伝えた。「はかつて彼女がそこに泊まっているところを訪れたことがあり、彼女が楽しんだことを知っていた。絵はたしかにニューイングランドの秋の色彩を」に思い起こさせた。

メアリーの表情は変化し、山を描きたいと主張した。塗たくった色の塊に力強い慎重な筆遣いで高低をつけ、山並みの姿をはつきりさせた。次に秋の色を浮き上がらせようと、黄色と灰青色の点々をつけ、最後に青空と太陽を注意深く描いた。太陽が緑にならぬよう、青絵の具を塗るのに気を配った。完成時メアリーは晴れ晴れとして得意げであった。(1980)

pp.99-101.筆者による一部改変あり。)

この記述は、たった一回のアートセラピー・セッションを簡潔に描写したもののだが、情緒不安定で衝動統制に困難を抱える子どもとの描画過程をよく伝えている。クレイマーは、「絵具の混ぜ合わせ、ぬたくり、そして茶色っぽい色の出現は肝門 攻撃衝動の昂ぶりをもたらしているが、メアリーにとつてそれはつねに外面に現れがちなものであった。彼女の弱々しい統制はぬぐいさられよつとしていた」と述べている(1980, p.100)。この事例で注目されるのは、アートセラピストがメアリーの塗たくりを中止させたことと、彼女に陽性感情の伴った記憶を想起させる助言を行った点である。心理療法の観点から見て、子どものこの破壊的になりそな塗たくりを途中で止めたことについては是非が問われるであろう。しかし、クレイマーは自分の介入について、子どもの弱い超自我を支えて、破壊行動の満足しうる代償を見いだす援助を行い、子どもの自我の働きを支援したと説明する。クレイマーの主張するアートセラピストの補助自我としての役割を果たしたと捉えられよう。これらの介入の理由は、単に審美的観点から見て、絵が破壊されるからというものでもなければ、行動が破壊的になることを抑止するといつものでもない。この子どもとアートセラピーを継続的に行ってきた経験と精神力動論的思考とに基づき臨牀的判断によって、彼女の描画行為が昇華につながるように導く意図があったのである。

さらに、クレイマーはメアリーの描画形式に触れ、空と太陽の描き方が図式的に子どもっぽい反面、山の描かれ方は洗練されて

いると言つ。しかし、その山の急傾斜を上る太陽という位置取りは、慣例に捕らわれない劇的なものだと認める。そして、塗たくりによって生まれた色彩に慎重に色を重ねた山の洗練された色彩は、偶然に生じた視覚上の可能性を感じとつて、効果的に活用したものであると観察する。このように、クレイマーは子どもの描画に対してもアートとしての質について厳しい吟味を加え分析する。彼女は、この絵のもつ大地と太陽と空とのバランスの中に、破壊的な力と建設的な力とのバランスを見いだしている。アートセラピストの支援を受け、メアリーが創作上の重要な決断を下したことが、彼女の内的なエネルギーを形に収め、バランスよく構成された質の高い絵画に結実し、彼女はその成果に満足した。この事例から、創作過程でメアリーの体験した経験の質がアートに表現されているとクレイマーは断言する。

アート創作過程における心理的体験

「治療としてのアート」論への考察を通して

ここから、クレイマーの理論と前掲の事例とを検証することにより、アートの創作過程における心理的体験を考察し、「治療としてのアート」を通しての個人の変容の可能性と限界について論じる。

1. 退行と創造性の問題 昇華との関連から

アートの創作には画材を使用する。画材を扱う過程での身体感覚と、無意識の表出したイメージとの関わりにおいて、描き手に退行が時として容易に促される。先に挙げたメアリーの事例では、

メアリーが絵の具の塗たくりに巻き込まれ、気分や衝動の統制に破綻をきたしそうになるところで、アートセラピストの介入が行われる。多様な色彩の絵の具を混ぜ合わせ、絵の具のどろっとした質感を筆の先に感じながら何十回と腕を動かした彼女は、心理的に退行し、初めはその感覚を大いに楽しみながらも次第に混沌としてくる描画に不快感を駆られたと思われる。この事例においては、この退行の適切な扱いがメアリーの昇華の過程に結びついたとクレイマーは理解しているようである。メアリーが衝動を適切に統制できず、創造行為が破壊的な方向へ進みそうになったと思われた時点で、アートセラピストが「ニューハンプシャーでの楽しかった思い出」を想起させることにより、その思い出に付随した感覚が、またはその言葉から彼女が喚起された感覚によって彼女の破壊衝動を中性化し、退行の助長を防いで新しい表現を生む転機として、昇華に結びついたと考えるのである。

退行状態と創造との関わりについては、クリス(Kris, Ernst)が芸術の創造過程研究(1952)で示した「自我に奉仕する退行」の概念を端緒に、その結びつきが指摘されている。自我が退行し、欲動が適度に解放され、そこに遊びや楽しみが伴われたり、無意識にあった葛藤や欲動が感じられたときに、それらが創造行為として結実する可能性が出てくるという考え方である。クレイマーも「一時的な退行はあらゆる創造的行為に欠くことのできない状態である」(1980, P.30)と述べている。抑制が強すぎて感情機能が適切に働かないクライアントに対して、治療者は画材や技法の選択を配慮し適度な退行を促して、クライアントの創造活動を支援することができる。その一例として、ケインやナウム

ブルグの考案したスクリブル技法も、描き手の防衛を緩め、自由度と創造性を高める上で役立つとクレイマーは認めている。また前述の事例でも明らかのように、子どもの場合、アートセラピーにおいて(他の表現療法においてと同様)、衝動を統制できなくなったり、強い感情に溺れたり、ファンタジーに圧倒されそうになることが時としてある。クレイマーは、子どもが衝動を統制し、ファンタジーや感情に形を与え、象徴表現に結びつけることによって統合できるかどうかを見極めて、アートセラピストは言語的介入や技術補助や種々の技法を用いるべきだと言う。青年や成人についても、アートセラピーの中で同様の状態が起きる可能性はあり、クレイマーの指摘は生きてくる。

クレイマーが複数の著作で示した豊富な事例は、背景についての記載が少ないために、子どもの障害の要因や症歴について不明な点が多い。しかし、その事例の中には、戦争、家族からの虐待、貧困などによる外傷体験を負った子どもが多いと推測される。これらの子どものもつ強い衝動、ファンタジー、不安定な感情を創作過程において体験させ、充足や発散を経て子どもの中に再統合させるために、クレイマーは子どもが一旦退行することを許容する姿勢を見せ、意義を認めている。メアリーの事例で考えれば、一見クレイマーはメアリーの破壊的行動を抑止しているように捉えることもできるが、そもそも退行を促すような画材とその使用方法を許容し、子どもの創作過程を注意深く見守っている様子が窺えるのである。著しい退行や混沌が生じるような治療過程を治療者が受け入れる場合には、守りのある環境と治療関係が必要である。それは、プレイセラピーなどと共通の原則であろう。クレイ

マーの考えるアートセラピストの基本的態度は、子どもが楽しんで創作活動に従事し、その葛藤が創作過程を通して作品の中に象徴的に解決していけるような治療環境の維持と美術教師的な技術的介入と的確な観察を行うものであり、それはすなわち、子どもの補助自我の働きをすることなのである。また、転移の問題については、転移関係を積極的に利用するのではなく、治療関係から起こることも創作過程の中に還元していく態度と言えるであろう。このような創作活動を媒介にした治療者の態度が外傷体験を含め心理的負荷を負った人への関わりに有効であることを、クレイマーの臨床経験自体が示していると思われる。

2. 「治療としてのアート」適用の可能性

クレイマーの主張のように、自我の統合に向けて、クライエントがアートセラピストの支援を受けながら質の高いアートを創作していくという指向性のアートセラピーは、身体的にも心理的にも大きく発達する時期にいる子どもとのアートセラピーにおいては、特に有効であるかもしれない。もちろん、思春期以降、成人にも適している場合はあるだろう。ただ、衝動性や感情や思考に描画や造形の表現を与え、葛藤を解決する過程は、必ずしも易しいものではない。創作過程で表出したイメージにクライエントが不快感を覚えたり、圧倒されたり、傷つくこともあり得るし、思うような表現にたどり着けずに葛藤が増幅したり、衝動性が増したり、疲弊する可能性もある。精神病や境界水準にある人々を対象としている場合には、病的な混沌へ陥ることもあり得るだろう。つまり、アートの創作過程における体験には、当然のこと

ながら個人に心理的危機を引き起こす要素があるのである。

山中は私見としながらも、「精神病者や神経症者など、心の平衡状態が不安定で繊細過敏な人びとは、却ってそれゆえに心の護りいけば自我境界に空隙を生じ、あるいは心的エネルギーの偏在による落差により、イメージのレベルや創造性領域に、本人の意志とは無関係に踏み込んでしまうのであり、また逆に、それゆえにこそ、それらのアレジメントや支え如何では治療への道も開かれる、と言えるのではないかと思っている」(1984, p.163)と述べ、同時に、病者が意識的もしくは無意識に創造性の領域へ立ち向かうことになった場合に、大変苦しい事態になりかねないことを、アートセラピーの導入に際して配慮するよう警鐘を鳴らしている(1984, p.163)。また、中井久夫は、分裂病患者とのアートセラピーに関する研究(1984)の中で、描画の特質に複合的な要素を同時的、現示的に提示できること、言語的投影が不可能または困難で、関係の中に関係を含むような観念を、心的エネルギーの消耗を少なく留めて表現しうる象徴体系であることを挙げ、描画活動が言語活動に比べて、「病的世界の衝迫に対する忍容度(tolerance)の高さが存在するのではないか」(1984, p.19)としながらも、分裂病患者の治療にアートセラピーを導入する際の治療者の態度として、次のように述べている。

私見によれば、分裂病者の描画活動について論じるためには、分裂病の主要な病型のすべてについてその全経過を治療的に許容される限り、追跡すべきである。その際、いかなる状況、いかなる治療関係において描画されたかを含む、正確な臨床記録

の完備が必要であり、さらに能う限り自験例に対する治療者のな「関与しながらの観察」であることが望ましい。また、たとえばしい一本の線と「芸術性」の高い完成画とを「哲学的に對等」とみなす用意が必要である。われわれは分裂病者の陳述を通常その言語表現の巧拙で取捨選択することはない。このことは絵画研究においては、あまりにしばしば忘れられているのではなからうか（1984, P.18）。

ここに見られる中井のアートセラピーにおけるアート観、治療観は、クレイマーのものとは非常に異なる。クレイマーの視点に立てば、中井のアートセラピーにおいては、アートはクライエントの病氣や障害を治療するために、病理の推移を判断したり、クライエントの心の働きや動きや感じ方を見たり、治療者、クライエント間係を支えたりするための手段として機能している。一方、クレイマーは、アートに病氣を治す力はなくとも、創作過程を通して、個人が人格的に成長したり、心理的困難を克服する治療的価値が潜在的にあるとする考え方であり、クライエントの試行錯誤を受け入れながら、より質の高い創作表現へ至るように援助するのが治療者の役割だと考える。クレイマー（1971）の思考では、アートセラピーとアートの創作活動に明確な境界は無いのである。しかしながら、中井の主張は、クレイマーのようなアプローチをとるにしても優れて示唆的である。クレイマーのアートセラピー理論にも、クライエントの描く一本の線の表すものへの配慮や理解に治療者が開かれる可能性は見受けられる（例えば、ステレオタイプな表現に対しての考察などに）。しかし、質の高

いアートの創作を指向するクレイマーのような治療的構えにおいては、作品の巧拙を問題にしているのではないにしろ、アートそのもののもつ治療的特性に力点を置くあまり、治療者、クライエント関係のあり方やクライエントの病理に應じてアートが変化することへの注意が疎かになったり、繊細さを欠く危険性を孕んでいる。ただし、クレイマーは、「治療としてのアート」観に基づくアートセラピーを万能とも思っていないし、それによって重篤な精神障害を治療することはできないと言っている（1980）。また、アートセラピストによる人格構造や病理水準の査定の必要性を唱え、描画と粘土造形を用いたアセスメント法を考案している（1983）。そのことは、クレイマーのようなアートへのアプローチ方法を導入する場合にも、その適用の是非を治療者が判断することの重要性を指摘していると思われる。また、クレイマーの示したアート創作活動を成り立たせる身体・画材・技術・心理の領域に渡る議論は、治療者がアート創作に関わる課題の設定、技術的な介入の仕方、創作環境の準備などについて考える上で、また、アートセラピーを行おうとする治療者に必要な資質を再考する上でも非常に参考になるであろう。

おわりに

クレイマーの理論を検討して明確に浮き上がってくるのは、彼女のアートセラピーにおける創作活動自体への熱意であり、たとえ創作過程が強い衝動性や葛藤を孕んでいたとしても、それを身体性を伴った表現行為を通して生き生きと体験し、対決したり乗り越えて作品に結実させていくことに治療的意義を見いだす姿勢

である。クレイマーが「昇華」の概念で説明しようとしたアートの望ましい創作過程とは、そのようなものではなかるつか。そして、たとえ高い質をもつアートを創り出すことに不成功であつても、その過程でクライアントが経験する心理的体験を理解し受容することが、アートセラピストに求められる態度であるというのが、クレイマーの主張だと考えられる。

2000年2月、「絵を描くことに興味のある人が集い、豊かで創造的な時間を過ごしましょう」という一文を案内に含めて、筆者は同年4月より甲南大学心理臨床カウンセリンググループの事業の一環として開始することになったアート・グループの参加者を募った。地域住民に開かれた外来心理相談室として機能することが設立理念の一つである当カウンセリンググループにおいて、文部省芸術フロンティア研究の助成を受けてグループ活動を実践できることは意義のあることと思われる。筆者はこのグループを企画し、画家の椋田三佳氏と組んで運営しているのだが、心理相談室にて画家と臨床心理士が協同で行うアート創作を目的としたグループに、何らかの心理的困難を抱えた人々が集い絵を描くという営みは、参加者の一人一人にどのような影響を及ぼし、どのような時間をもたらしうるだろうか。この活動は、何らかの治療的意義をもつだろうか。このアート・グループの運営においても、クレイマーの主張を参考にしながら、創作活動そのもののもつ治療的意義を信頼して、参加者の仕事を見守り援助していきたいと思う。

参考文献

Cane, F. (1951 / 83) The Artist in Each of Us. Vermont: Art Therapy Publications.

飯田真 (1984) 概説 . 飯田真・笠原嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫編 , 岩波講座精神の科学 9 創造性 . 岩波書店 , 22 - 23 .

Kramer, E. (1971) Art as Therapy with Children. New York: Shocken Books, Inc., 219. 徳田良仁・加藤孝正訳 (1980) 心身障害児の絵画療法 . 黎明書房 . 4, 30, 69, 88, 99-101, 100.

Kramer, E. (1979) Childhood and Art Therapy: Notes on Theory and Application. New York: Shocken Books, Inc.

Kramer, E. & Schehr J. (1983) An art therapy evaluation session for children. American Journal of Art Therapy, Vol.23.

Kris, E. (1952 / 65) Psychoanalytic Explorations in Art. New York: Intenational Universities Press, Inc.

Naumburg, M. (1966) Dynamically Oriented Art Therapy: Its Principle and Practice. New York: Grune & Stratton, Inc. 中井久夫監訳 , 内藤あかね訳 (1995) 力動指向的芸術療法 . 金剛出版 .

中井久夫 (1984) 精神分裂病者の精神療法における描画の使用 . 中井久夫著作第 1 巻 分裂病 . 岩崎学術出版社 , 18 , 19 . 初出は 1971 年発行の日本芸術療法学会誌第 2 号 .

Ulman, E. (1975) Art Therapy: Problem of Definition. Ulman, E. & Dachinger, P.(eds). Art Therapy: In Theory and Practice. New York: Shocken Books, Inc.

Wilson, L. (1979) Introduction: Kramer's Theoretical Formations. Childhood and Art Therapy: Notes on Theory and Application written by Kramer, E. New York: Shocken Books, Inc., xxviii-xxix.

山中康裕 (1984) 治療過程における創造性 . 飯田真・笠原嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫編 , 岩波講座精神の科学 9 創造性 . 岩波書店 , 153 .